

中国遼寧省大連における日本租借地の日本人野球の誕生と発展が、大連の中国人野球の誕生と発展へ及ぼした影響

松岡弘記^{*}，李俊兰^{**}，樊孟^{***}

I. はじめに

1908（明治41）年日本租借地であった大連において、日本人が始めた野球は子供から大人まで広い年代において普及拡大し、野球をする人も、観る人も増やした。この地の中等学校の大連商業は、満州代表として第12回全国中等学校野球優勝大会（甲子園大会）で準優勝し、また、社会人野球では、大連代表の野球チームが日本の内地で開催された都市対抗野球大会で第1回大会から第3回大会まで3連覇という偉業を成し遂げた。この日本租借地大連での野球は、大連の日本人に超人気スポーツとなり、大連満州倶楽部と大連実業団チームとの対抗戦（実満戦）が毎年行われ、その野球レベルの高さもあり、大連市民を二分して盛り上がり、西公園（のちの中央公園）に作られた野球場は超満員となる大盛況の一大イベントまでになった。この大連の日本人野球における普及拡大と発展の要因は何だったのか。

一方、このような日本人の子供から大人まで大連の至る所で普及拡大して行われていた野球が、何故大連の中国人にほとんど受け入れられなかったのか。当時の天津や上海では中国人が野球を行い、中国人同士やあるいは日本人やアメリカ人と対戦や大会が行われる程に普及しており、その違いが何故起きたのか、その理由を探りたい。また、1945（昭和20）年の日中戦争の終戦により日本人の大連野球は終焉を迎えるが、ごく僅かな中国人の野球経験者がその後大連で中国人野球を普及発展させていくが、そこには当時の日本人野球とどのような繋がりがあったのかを検証する。

本調査研究は、中国遼寧省の大連において日本租借地で誕生した日本人野球がどのように発展したかを明らかにし、次に大連における中国人野球の誕生とその発展を明らかにする。さらに、その両者の野球の誕生と発展の違いは何かをつきとめ、その違いを起こした理由と、また、戦後の大連における中国人野球の普及拡大と発展に大連の日本人野球はどのような繋がりがあったのかを検証する。

大連の日本人野球の誕生と発展に関しては、日本租借時における大連の野球の試合を網羅した泰源治著の「わが国 球界をリードした大連野球界」^{註1}と西脇良朋著の「満州・関東州・華北中等学校野球史」^{註2}、坂本邦雄の「紀元2600年の満州リーグ—帝国日本とプロ野球—」^{註3}の著書にその詳細が書かれている。また、筆者が知る限り、大連における中国人野球の誕生と発展に関しては、「大連市志、大連体育志」^{註4}と「中国棒球運動史」^{註5}に、その概略が記載されているだけである。以上の限られた文献しかないが、これらにより、本調査研究を主に行うこととした。

II. 中国遼寧省大連市の概況

1. 大連の誕生

中国遼寧省大連市は、ユーラシア大陸の東岸に位置し、中国北東部の遼東半島の最南端にある。東は黄海、西は渤海、南は海を隔てて山東半島があり、北は広大な北東平原に面している。中国の東北、華北、華東へ及ぶ世界各地の海の玄関であり、重要な港湾、貿易、産業、観光の人口約600万人の都市である。^{註6}大連の旧都市名である「ダーリニー」は、1898（明治31）年に

* 愛知大学現代中国学部教授

** 天津財経大学珠江学院外語系講師

*** 愛知大学現代中国学部非常勤講師

清露間にパプロフ条約が締結され、帝政ロシアが東清鉄道幹線ハルピンより旅順、遼東半島の南端を租借し、その地まで鉄道を延長することとし、大連湾に面した人家少なき寒村の青泥窪に商港都市が建設された。1901（明治34）年には東清鉄道の全線が完成し、1902（明治35）年に帝政ロシアによるダーリニー特別市政が実施された。この「ダーリニー」は「遠方」の意味であり、帝政ロシアは、パリをモデルに多心放射状街路の都市を建設し、また、東西を二分して東を欧米人街、西を中国人街とした。^{註7}

1903（明治36）年にロシア軍が奉天を占領して、日露間に緊張が高まり、翌年、2月に日本艦隊が旅順のロシア艦隊を攻撃、5月に日本軍がダーリニーを無血占領した。1905（明治38）年2月にダーリニーは日本軍により「大連」と改名された。この年の9月に帝政ロシアとの日露講和条約（ポーツマス条約）に調印し、遼東半島南端（関東州）のロシア租借地を日本租借地とし、長春～旅順・大連間の東清鉄道線とそれに付随する鉄道附属地や鉱山開発権を日本はロシアから譲渡した。^{註8}その後、終戦を迎える1945（昭和20）年までの40年間、大連は日本租借地として都市整備がなされて発展した。

2. 日本租借地としての大連都市整備

西澤泰彦著の『図説大連都市物語』^{註9}から大連都市整備について以下にその概要をまとめる。日本政府は、ロシアから譲渡された権利を確実に行使し、中国東北地方の支配を確固たるものにすべく、1906（明治39）年9月に旅順に関東都督府を設立し、大連には大連民政署を置いて大連の行政を担当させた。一方、日本政府は11月、ロシアから譲渡された長春以南の東清鉄道南部支線を経営するために半官半民の南満州鉄道会社（満鉄）を設立し、鉄道経営に加えて鉄道に付随する鉄道附属地の行政、沿線の炭鉱・鉱山の開発、さらに大連港の建設と経営までもこの会社に託した。翌年、満鉄は東京から大連に移り、本格的に営業を始めた。

大連の都市基盤整備は、関東都督府土木課が道路、橋、上下水道の建設を担当し、満鉄は、

電気、ガスのエネルギー供給と市内交通の路面電車と大連港の建設を担当した。その後、大連には文化都市の象徴である「アスファルトの道」が作られ、東洋一の下水道と完備された水洗便所、さらに電気・ガスの供給が始まり、新しい都市である大連で欧米人と同じ生活水準が確立され、建物はレンガ造り、石造り、鉄骨耐火構造の洋風建築都市が整備されていった。

帝政ロシアがこの「ダーリニー」を大連湾に注ぐ青泥窪で東西を二分して公園と苗圃を境にして東を欧米人街、西を中国人街としてきたが、日本人が「大連」としてからその垣根を越えて西へ日本人街が進出し、さらに中国人街を西へ追いやった。

Ⅲ. 大連での日本人野球の誕生と発展および終焉

1. 大連での日本人野球の誕生

大連での日本人野球の誕生については、坂本邦雄の「紀元2600年の満州リーグ—帝国日本とプロ野球—」^{註10}の著書から次のようにまとめられよう。大連の日本人野球の始まりは、満鉄が起こした。満鉄が設立された翌年に大連に本社を移し、その1907（明治40）年9月に満鉄の人材育成のための満鉄見習夜学校（のち満鉄育成学校）を開設し、1908（明治41）年3月に、この学校に「若葉会」の名称で野球部を結成した。同年8月に一高、京大から満鉄入りした平野正朝をコーチとして迎え入れた。平野は、一高野球部の名2塁手として活躍した選手であり、「一高式の一際目立ったプレー」を若葉会へ伝授し、同年秋に若葉会の発会式を兼ねた野球大会が開催された。また、大連で行われた外国人チームとの最初の試合は、1909（明治42）年9月に、大連に入港した米国東洋艦隊との親善試合であり、若葉会は3対9で負けた。

2. 大連での日本人野球の発展と終焉

大連での日本人野球の発展と終焉に関しては、泰源治の「わが国球界をリードした大連野球界」^{註11}から次の1)～4)にその概略をまとめる。

1) 中等学校野球

大連には1908(明治41)年に若葉会が誕生したが、旅順には1910(明治43)年に工芸技術者養成のために旅順工科学堂(のちの旅順工科大学)^{注12}が設置され、霊陽会と称する野球部が設立され、両校は練習試合をしていた。その他に中等学校が設立され、大連には、1910(明治43)年に大連商業学校^{注13}、1911(明治44)年に南満州工業学校(のちの南満州工業専門学校)^{注14}が、旅順には1909(明治42)年に旅順中学校^{注15}が設立されて、いずれの中等学校にも野球部が作られて交流対戦が行われた。満州中等学校野球が形を成してきたのは、1912(大正元)年から始まった南満工業対大連商業の定期野球戦である。1916(大正5)年には「全関東州野球大会」が開設されて、社会人チームに交じって中等学校野球部も参加したので、大いに錬磨を受ける良い環境となった。また、特に社会人チームの大連満州倶楽部^{注16}と大連実業団チーム^{注17}および内地から東京六大学野球リーグの優勝チームが遠征にやってきて、その両チームと戦う野球エリートの姿を見る機会は、大連の中等学校野球レベルの向上にも影響を与えた。

しかし、南満工業と大連商業の定期戦は、両校の応援団の超熱狂的な争いから1917(大正6)年～1919(大正8)年の3年間中断され、1920(大

正9)年から復活したが、1921(大正10)年からは、両校の定期戦を中止し、「全国中等学校野球大会満州予選大会」に移行し、毎年7月に満倶球場^{注18}または実業球場^{注19}で行われた。表1に全国中等学校野球満州予選大会の優勝校と全国中等学校優勝野球大会の満州代表の戦績を示した。

第1回大会は大連商業が優勝して第7回全国中等学校優勝野球大会へ出場し、いきなりベスト4へ進出する大活躍をした。その後、大連商業は、14年間で12回優勝し、全国中等学校優勝野球大会へ出場した。そこでの戦績は、ベスト4が3回、1926(大正15)年の第12回大会では、決勝で静岡中学に2対1で敗れたが、準優勝となり、その間、満州代表として輝かしい戦績を残した。しかし、1935(昭和10)年、大連商業の野球部が、学校側からの校友会経費節減を理由に廃部とさせられ、大連における中等学校野球は終わりを告げる。

2) 社会人野球

1913(大正2)年から大連の社会人野球の代表的な「実満戦」が始まった。この実満戦は、大連満州倶楽部(略称：満倶)チームと大連実業団(略称：実業)チームの対抗戦である。大連満州倶楽部は満鉄および関連会社の社員を主体としたチームであり、その他の大連実業界の

表1. 全国中等学校野球満州予選大会の優勝校と全国中等学校優勝野球大会での満州代表の成績。

全国中等学校野球満州予選大会					全国中等学校優勝野球大会		
開催年	回数	優勝	参加校		回数	満州代表戦績	参加校数
1921	大正10	第1回	大連商業	大連商業、南満工業、旅順中学	第7回	ベスト4	17
1922	大正11	第2回	南満工業	大連商業、南満工業、旅順中学	第8回	1回戦敗退	16
1923	大正12	第3回	大連商業	大連商業、南満工業、奉天中学	第9回	1回戦敗退	19
1924	大正13	第4回	大連商業	大連商業、南満工業、奉天中学、長春商業	第10回	ベスト4	18
1925	大正14	第5回	大連商業	大連商業	第11回	ベスト4	21
1926	大正15	第6回	大連商業	大連商業、青島中学、長春商業	第12回	準優勝	22
1927	昭和2	第7回	大連商業	大連商業、長春商業、奉天中学	第13回	1回戦敗退	21
1928	昭和3	第8回	大連商業	大連商業、青島中学、奉天中学	第14回	1回戦敗退	22
1929	昭和4	第9回	青島中学	大連商業、奉天中学、撫順中学、安東中学、青島中学	第15回	1回戦敗退	22
1930	昭和5	第10回	大連商業	大連商業、奉天中学、撫順中学、安東中学、青島中学	第16回	ベスト8	22
1931	昭和6	第11回	大連商業	大連商業、奉天中学、撫順中学、安東中学、青島中学	第17回	2回戦敗退	22
1932	昭和7	第12回	大連商業	大連商業、奉天中学、安東中学、青島中学	第18回	1回戦敗退	22
1933	昭和8	第13回	大連商業	大連商業、奉天中学、安東中学、新京商業	第19回	1回戦敗退	22
1934	昭和9	第14回	大連商業	大連商業、奉天中学	第20回	2回戦敗退	22
1935	昭和10	第15回	青島中学	青島中学、奉天中学、奉天商業	第21回	1回戦敗退	22

会社・商店から選手を出して混成されたのが大連実業団チームであった。この実満戦は大連社会人野球の発展を促す動機となり、市内各職場に社会人野球の気運を高め、埠頭倶楽部、満鉄本社、大連駅、鉄道工場、用度課、通信管理局、地方課、消費組合、電気BC倶楽部、国際運輸、満州電業等、続々と有力チームが組織された。このため1916（大正5）年から満州日日新聞社主催の下に若葉会、大連商業、南満工業、霊陽会、旅順中学および実業チームも加わり、「全関東州野球大会」が開催され、1942（昭和17）年の第27回大会まで行われた。この大会には、実業は1チームとして出場したが、満倶チームは各部所毎に出場したため、実満戦が1920（大正9）年まで中断された。しかし、満州日日新聞社の斡旋にて1921（大正10）年から中断されていた実満戦は再開され、1927（昭和2）年から始まった「全日本都市対抗野球大会」^{注20}の関東州代表がこの実満戦によって決定されることとなり、その人気は“満州の早慶戦”と呼ばれて一気に高まった。実満戦は大連市民を二分する大イベントとなり、中央公園の野球場は、内外野ともに超満員となった。

両チームとも毎年内地の野球エリート大学から超一流選手を次々にスカウトし、格別高額な給料で補強しており、東京六大学の優勝チームが満州に遠征にやってくると、満州各地を回っているうちに必ず主だった選手はスカウトされていたという。

表2に実満戦の戦績と全日本都市対抗野球大会の大連代表の戦績を示した。毎年、大連の実満戦の両チームのいずれかが関東州代表として出場し、第1回大会は満倶が優勝、第2回大会は実業が優勝、第3回は満倶が優勝と大連からのチームが3連覇を成し遂げた。以後、第5回大会で満倶が初戦敗退する以外ベスト4以上の成績を残し、第6回は満倶、第10回は満倶、第14回は実業がそれぞれ準優勝を果たし、野球狂の街大連に輝かしい栄光を与えた。

3) 少年野球

1918（大正7）年に内地で軟式少年野球用の

ゴムボールが発明^{注21}され、翌年に販売されるや全国各地に波及し各小学校に野球チームができた。大連でも同じように市内の各小学校に野球チームができて、市主催の少年野球大会が始まり、毎年行われた。

1923（大正12）年6月14日付けの新聞記事に^{注22}「少年野球大会」があるが、第何回目や大会の正式名称も不明だが、第三（のちの常磐小）が第六（のちの松林小）に大勝し、沙口小が第二（のちの日本橋小）に惜敗したことが記載されているのが、大連での少年野球大会の最初の記録となっている。

その後、新聞記録として大連の小学校が参加した少年野球の大会が掲載されているのは、

1930（昭和5）年8月23日付けの毎日新聞^{注23}であり、早稲田（戸塚）球場で行われた第11回全国少年野球大会に朝日小チームが大連市代表として初戦を突破し、2回戦まで勝ち上がってベスト8となったことが記載されている。大連代表として出場しているには、大連市で予選会があるはずであるが、それらの記録は不明となっている。

大連の少年野球の記録として残っているのは、1934（昭和9）年から満州日日新聞社主催で始まった「大連全市学童軟式野球大会」であり、第7回大会まで毎年行われた。表3に大連全市学童軟式野球大会の優勝校を示した。同年に第1回大会は、満倶球場にて5校8チームが参加して日本橋小学校が優勝した。翌年第2回大会は、満倶球場と実業球場にて11校19チームが参加して行われ、超満員のスタンドの応援にて朝日小学校Aチームが優勝した。

その後、毎年開催され、第3回は日本橋小学校、第4回は6年生をA組、5年生をB組の区分を設けて行われた。A組は12チームが参加し大広場小学校が優勝、B組は16チームが参加し、朝日小学校が優勝した。第5回大会は、A組は22チームが参加し、朝日小学校が優勝、B組は14チームが参加し、日本橋小学校が優勝した。第6回大会は、A組は19チームが参加し、朝日小学校が優勝、B組は19チームが参加し、伏見台小学校Aが優勝した。

表2. 実満戦の戦績と全日本都市対抗野球大会の大連代表の成績.

実満戦（大連実業団対大連満洲倶楽部）の戦績				全日本都市対抗野球大会の大連代表の戦績		
開催年	戦績	勝者	回数	大連代表の戦績	参加都市チーム数	
1913	大正2	2対1	満俱			
1914	大正3	2対0	満俱			
1915	大正4	1対0	満俱			
1916	大正5	1対0	満俱			
1917	大正6	中止				
1918	大正7	中止				
1919	大正8	中止				
1920	大正9	中止				
1921	大正10	春2対0	実業			
		秋2対1	実業			
1922	大正11	春2対0	実業			
		秋2対0	実業			
1923	大正12	2対0	満俱			
1924	大正13	2対0	満俱			
1925	大正14	2対0	実業			
1926	大正15	2対1	実業			
1927	昭和2	2対1	満俱	第1回	優勝 12	
1928	昭和3	2対0	実業	第2回	優勝 13	
1929	昭和4	2対0	満俱	第3回	優勝 14	
1930	昭和5	2対0	満俱	第4回	ベスト4 15	
1931	昭和6	3対1	満俱	第5回	1回戦敗退 15	
1932	昭和7	3対2	満俱	第6回	準優勝 16	
1933	昭和8	3対2	実業	第7回	ベスト4 16	
1934	昭和9	3対1	満俱	第8回	ベスト4 16	
1935	昭和10	3対2	満俱	第9回	ベスト4 16	
1936	昭和11	3対1	満俱	第10回	準優勝 20	
1937	昭和12	3対1	満俱	第11回	支那事変のため参加不能 14	
1938	昭和13	3対1	満俱	第12回	ベスト4 16	
1939	昭和14	3対1	満俱	第13回	満州情勢により出場辞退 14	
1940	昭和15	3対0	実業	第14回	準優勝 16	
1941	昭和16	夏3対2	実業	第15回	大会中止	
		秋1対1	引き分け			
1942	昭和17	2対2	実業	第16回	ベスト4 16	
1943	昭和18	中止			戦況悪化のため大会中断	
1944	昭和19	中止			戦況悪化のため大会中断	
1945	昭和20	中止			戦況悪化のため大会中断	
1946	昭和21	復活	?	第17回	戦後復活・外地チーム消滅 16	

表3. 大連全市学童軟式野球大会の優勝校.

開催年	回数	優勝校	参加チーム数
1934	昭和9	第1回	日本橋小学校 8
1935	昭和10	第2回	朝日小学校A 19
1936	昭和11	第3回	日本橋小学校 15
1937	昭和12	第4回	A組 大広場小学校 14 B組 朝日小学校 16
1938	昭和13	第5回	A組 朝日小学校 22 B組 日本橋小学校 14
1939	昭和14	第6回	A組 朝日小学校 19 B組 伏見台小学校 19
1940	昭和15	第7回	A組 朝日小学校 17 B組 常磐小学校 14
1941	昭和16	第8回	中止

第7回大会は、A組は17チームが参加し、朝日小学校が優勝して三連覇を果たし、B組は14チームが参加し、常磐小学校が優勝した。今回から大連中央放送局（JQAK）が優勝戦を放送するとともに両優勝チームに優勝盾を寄付した。また、実業と満俱の両倶楽部から本社を通じて両優勝と準優勝チーム持ち回りの優勝杯が贈られた。さらに、市役所、体育堂、玉澤運動具店より両優勝チームに商品が寄贈された。

4) 大連野球の終焉

1941（昭和16）年7月、日本軍に大動員令が下ったので全国的な集会禁止の文部次官通達が出されたため、「全日本都市対抗野球大会」、「全国中等学校優勝野球大会」、「全国少年野球大会」は中止となった。大連でも「第8回大連全市学童軟式野球大会」が中止となった。しかし、翌年は「全日本都市対抗野球大会」のみが開催を許された。その理由は、大東亜戦争開戦開始の戦況有利と戦意高揚に資するためとして行われた。1943（昭和18）年以降の大会は終戦まで中断され、その間、これまでの大連の日本人野球は消滅した。

しかし、1946（昭和21）年初夏に大連では、いつ引揚げが始まるかわからない不安状況下で、大連中等学校野球大会（軟式）が、大連一中、大連二中、大連三中、大連工業、大連中学、大連商業、大連実業の7校が参加して総当たりリーグ戦を行い、大連一中が優勝した。同年の真夏～初秋にかけて大連日本人労働組合が難民救済基金募集を名目にして硬式による大連中等学校野球大会を企画し、上記7校が参加して総当たりリーグ戦を行い、大連三中が優勝した。在留邦人がこの野球大会に勇気づけられ、実業球場には多くの日本人が詰めかけて超満員であり、売り子も出る程の大盛況であった。

同年初秋には、日本人労働組合が、満州各地から生き逃れて大連に辿り着いた日本人難民の救済基金募集のために実満戦の復活を企画した。しかし、名ばかりの実満戦であり、出場選手は旧チームに関わりのあった人を集め、南満工専野球部からも数名が集まってダイヤモンド

（実業）対ホワイトソックス（満俱）の名称で入場券売上げの全額を寄付するということで行われた。両チームには過去の実満戦で、満俱の左腕エースとして大活躍した浜崎真二、実業で三塁手4番打者の強打者として活躍した津田四郎の二人がいたことが記録されている。しかし、当日のメンバー表、スコア表、入場者数、寄付金額等の資料がなく不明となっている。

IV. 大連での中国人野球の誕生と発展

大連での野球誕生とその発展については、「大連市志、大連体育志」^{註24}から、その概略を以下の1.と2.にまとめる。

1. 大連での中国人野球の誕生

大連で最初に野球を始めたのは、1909（明治42）年、日本人であった。野球は日本人にとって比較的基本の運動であり、発展も比較的速く、1920年代（大正9）の初めには西公園（のちの労働公園）^{註25}に、先ず二つの正規の野球場が建設され、日本人は、頻繁にその野球場で練習と試合を行った。

当時、満俱と実業の両野球チームが日本人の強いチームであり、中国人の間には、長い間野球運動が広まらず、1930年代以降になってようやく、ほんのわずかな中国人がこの運動に参加したようである。この点に関して元中国野球協会副主席の任挙一氏は、「1934（昭和9）年～1945（昭和20）年は日本人がたくさんいたので、日本人の野球に参加した人も多い」^{註26}と述べている。

また、元大連野球チームのエースとして第1回全国運動会の野球に出場した馬家新氏は「子供だったが、大連で満鉄などの試合がある時よく見に行った。」^{註27}と述べている。中国人の中の一部の子供は実満戦などを観に行っていたことがわかった。また、任氏が述べている日本人の野球に参加した中国人も実満戦などを観に行っていたのかも知れない。

2. 大連での中国人野球の発展

1945（昭和20）年、日本降伏後、野球愛好者

の一部が継続して野球活動を展開していったことで、当時は東北においては、また、比較的強い地位までとなった。1959（昭和34）年、大連野球チームが作られ、遼寧省の代表として第1回全国運動会の野球大会で8位となった。1959（昭和34）年、1960（昭和35）年には2度にわたり、遼寧省野球大会で優勝した。この点に関して任氏は「日本人が引き揚げた後も、1945（昭和20）年～1960（昭和35）年頃は、引き続き工場、新聞社などの野球チーム（大連造船所、金州紡績所など）を持っていて、かなり多くの人が野球をしていた。日本人が引揚げに際して残していった道具も一杯あった。」^{注28}と述べていた。

その後、自然災害と文化大革命の影響により、大連全市の野球運動は14年間中止となった。^{注29}この野球活動の再開は、1975（昭和51）年、市体育委員会が大連第3中学を重点対象として新たな野球チームを設立してからであり、この点に関して任氏は「復活するのは1975（昭和51）年からで、ここでも、日本人が大きな役割を果たしている。日中貿易が再開して、大連港に入港する日本人船員たちが、野球をするようになる。」^{注30}と述べている。1978（昭和53）年、市野球協会が設立され、同年5月には大連第3中学の生徒による大連チームが構成され、全国野球リーグ戦で5位となった。同年8月、沈陽体育学院チームと沈陽チームに各々33対1と9対0で大勝し、遼寧省で1位となった。

市体育委員会は、野球運動レベル向上に努めるため、1979（昭和54）年1月、大連野球・ソフトボール協会を設立した。1980（昭和55）年～1990（平成2）年の11年間、大連市野球運動は迅速な発展を遂げた。

1981（昭和56）年1月、国家体育委員会はアメリカ野球専門家による講義を開催し、任挙一、李兆斌、陳建新らが参加した。同年8月、日本石油野球チームが大連で中国野球チームと親善試合をし、市体育委員会は、大連野球チームのコーチと選手に参観、学習する機会を与えた。そこで見たものは大きく眼を開かせる程の日本石油野球チームの精悍な技芸であり、大連野球チームは、新しい技術と戦術を学習した。同年、

中国野球協会は、大連で全国野球訓練活動会議を開催し、各姉妹省市の先進経験を学習した。任挙一は大連市と自分自身のコーチとしての活動経験を紹介し、大会に参加した代表と交流を深めた。

1982（昭和57）年、市体育委員会は、全市の小学、中学、中専門体育学校の3段階レベルの野球訓練体制を確定し、1983（昭和58）年、大連体育学校に野球専門クラスが設立された。市児童チームは1983（昭和58）年6月、全国児童軟式野球大会に初出場して3位、1984（昭和59）年、1985（昭和60）年には第1位を獲得し、1986（昭和61）年、1987（昭和62）年の両年は2位であった。

市少年チームは、1980（昭和55）年に大連を訪問した日本少年野球チームと初対戦し、1981（昭和56）年にも2度目の対戦をしたが、いずれも日本少年野球チームに敗れた。1981（昭和56）年7月、市少年チームが全国野球重点チーム調整試合に参加し、アマチュア少年チームが各青年プロチームと対戦し、4位の好成績を納め、国内野球界の注目を集めた。1982（昭和57）年、任挙一がコーチに就任し、大連の選手を主軸とする中国の少年野球チームを率いて、第1回世界少年野球大会へ参加のため日本へ行った。数年の苦闘を経て、1986（昭和61）年と1987（昭和62）年には、訪問に来た日本国家少年野球チームに勝利し、大連少年野球運動の技術レベルを見せつけた。1988（昭和63）年8月、大連市の少年野球チームは再度、中国代表として中国、日本、アメリカの3カ国の少年野球対抗戦へ参加し、全勝の戦績で優勝した。

市の青年チームは1982（昭和57）年、1983（昭和58）年、1984（昭和59）年に全国青年野球大会で連続優勝し、それ以降の全国大会で決勝に進み、1989（昭和64）年にも全国優勝を果たした。1980（昭和55）年以降、大連市は成人野球チームを設立し、1984（昭和59）年に第1回全国リーグ戦で6位、1985（昭和60）年に順位を上げ5位へ、1986（昭和61）年も順位を上げ3位、以降、4位以上を保持し、1988（昭和63）年、全国リーグ戦で準優勝した。

大連市の成年野球チームは1986（昭和61）年、大連においてアメリカ籍のアジア人オールスター野球チームと対戦し、1勝1引き分けの好成績を納めた。大連市の各年齢層野球チームは、1980年代の全国的大会で技術レベルを向上させ、試合の成績は常に上位にランクされていた。

1985（昭和60）年、遼寧省体育委員会は大連野球チームを遼寧省の代表チームに確定し、野球チームをセミプロからプロに転向させた。1986（昭和61）年、国家体育委員会は大連市を全国で野球を積極的展開する10の重点都市の一つに確定した。1987（昭和62）年、遼寧省はスポーツトレーニング種目構成を調整し、省の野球チームを廃止した。しかし、大連市体育委員会は野球チームを存続させ、選手を調整し、長期的な目標管理を行うこととした。

この1980年代の間、大連市野球チームの選手である李兆斌、陳継勇、尹宝良、黄庚宇、隋玉昆たちが、相次いで国家チームに選ばれ、中国代表として何度も国際野球大会に出場した。大連市の各年齢層代表チームは遼寧省野球活動の代表となり、沈陽体育学院に10人あまりの選手を送り出した。1986（昭和61）年、任挙一は全国野球運動の発展に貢献したことを認められ、中国野球協会の副主席に選ばれた。

1990（平成2）年6月、市野球協会は東北財政大学技術開発会社と契約を結び、大連野球チーム連合を開設し、大連市の野球発展のための経済的支柱とした。

V. 大連での日本人野球と中国人野球の違い

1. 大連での日本人野球と中国人野球の誕生の違い

1) 大連での満鉄による日本人社員育成のための野球

大連の日本人野球は、1908（明治41）年に大連の満鉄見習夜学校に野球部の「若葉会」が結成され、一高で名2塁手として活躍し、京大を卒業して満鉄に入社した平野正朝をコーチとして迎え入れて始まった。

坂本は「満鉄は創業以来、一貫して社員のスポーツ、特に野球を奨励した。満鉄創業期は、日本で野球害毒批判が猛威を振るった時期に重なるが植民地で野球は歓迎されたのだ。その理由として、一つには異国の植民地都市に暮らす若者の不安や怯え、寂しさなどを慰め、不健全な生活に墮すのを防ぐことがあった。」^{注31}と述べ、台湾の植民地を例に上げて、そこでも娯楽が少なく、無聊を慰めるために「飲む、打つ、買う」の自堕落な暮らしに陥り、風土病や花柳病（性病）を患い、また、懐郷病（ホームシック）になる若者が多かったが、台湾総督府が野球を健全な娯楽として奨励し、それらの対策に大きな効果を上げた。

満鉄はその台湾での成功体験を満州に持ち込んだという。二つ目の理由は、日本への帰国の思いを抑え込んで満州に定住を促すために、チームスポーツである野球を奨励し、仲間作り、職場の地域の絆や繋がりを深めること。また、野球の試合があれば、選手でなくても観客として自分の所属する会社や商店、まちへの愛着心を育てることとなり、地域への帰属意識を向上させて定住を促す役割を期待したようである。

さらに、満鉄は後藤新平^{注32}の掲げた「文装的武備」の経営方針により植民地統治は武力だけでは不可能であり、教育、学術、衛生などの「文事的施設」を整備し活用することによって現地人に日本人への畏敬の念を抱かせ、他国の侵略を防ぐ何よりの盾となるという経営戦略によって鉄道、炭鉱港湾事業などの他に学校、図書館、病院、ホテル運動施設などの文化や社会インフラの整備を進めた。特に満鉄沿線の主要都市の真ん中に次々と作られた野球のできる運動場は、アジアにおける日本の近代の象徴であると坂本は指摘している。^{注33}

このように大連での日本人野球は、満鉄が主導して野球を奨励して作った満鉄見習夜学校に野球部の「若葉会」を結成して始まった。満鉄がその野球奨励をした背景は、若者の健全育成と仲間や職場の絆や繋がりを深め、人材の大連への定住促進のためであった。

2) 大連の中国人の社会人野球の誕生

一方、これに対して大連の中国人は、この同じ時に野球を行った記録はなく、1930年代以降に大連のほんの一部の僅かな者が日本人の野球に参加したとの記録がある。実際にどの程度の者がどのように参加したのかの記録は見当たらないが、1930年代が大連での中国人野球の始まりとされている。

この点について、高島は1931（昭和6）年の盛京時報から大連では日本人が中国人へ野球指導することもあったが、沙河口工場見習チームやJTBチームといった大連の二流以下のチームが相手にしており、同年6月に行われたJTB戦が大連における日華対抗試合の嚆矢（実際はそうではない）であると伝えられるほどに珍しいものであったという。^{注34}このように中国人の社会人のほんの一部の者だけが日本人から野球指導を受けて行ったに過ぎず、その後、中国人の社会人が野球を継続して行ったとの記録は筆者が知る限り見当たらない。

坂本は満州で野球をやったのは日本人だけであり、ごく一部の例外を除けば、中国人が野球をやることはなく、満州では中国人と直接関わる形で野球が植民地統治に利用されることはなく、もっぱら在満日本人の無聊を慰め、定住を促すとともに、移植民を促進する手段として活用されたと指摘している。^{注35}また、在満日本人の活動範囲は多くの場合、日本人間に限られ、中国人と接する機会はほとんどなく、仕事で中国人と接する人以外は中国語を話せる人も極めて少なくとも統治が可能であった。このため日本人の活動範囲を越えてまで野球を通じて中国人と関わる必要がなかったと坂本は指摘する。^{注36}

このように大連の中国人野球は、日本人と仕事上で関わりのあった一部の中国人が、日本人の社会人の指導の下に野球を教わったことで始まったといえよう。

3) 大連の初等教育機関の野球の誕生にみられた日中間の違い

日本の内地での子供の野球遊びが始まった

のは、一高、早稲田、慶応などの対抗試合が一般の人にも広がり、全国の子供の血を湧かせたのが、1910（明治43）年前後ではないかと考えられている。この頃には、街の空地や原っぱなどで、「三角ベース」や「折返しベース」の子供たちの野球のまねごとが始められ、グラブやミットなどの用具が高価で手に入らないのでバットは木を削って作り、おもちゃ用のボールを素手で遊んだ。1912（大正元）年頃には、小学校の校庭の片隅が野球場となり、休み時間に遊び、野球チームが小学校に作られ、都市部ではグラブやミットをはめて野球をする子供がみられ、スポンジボール、軟式庭球用の「赤M」ボール、硬式庭球用のボールなど様々なボールを使用していた。^{注37}しかし、大連では1912（大正元）年に南満工業と大連商業の定期戦が開始され、翌年に実満戦が始まったばかりであり、大連の子供たちが野球のまねごとを始めるのは、これ以降ではなかろうか。

その後、1918（大正7）年にゴムボールが発明され、翌年から販売されて、瞬く間に全国へ普及し、大連へも持ち込まれ、1920（大正9）年頃には大連の各小学校に野球チームが誕生した。1923（大正12）年には大連で小学生の「少年野球大会」開催記事が新聞に掲載されており、それまで盛んに野球が各小学校で行われてきたことがわかる。

表4に大連の中国人と日本人の各々の初等教育機関と中等教育機関の設置年と設置場所（No.）および校名を示した。

大連では、日本人の初等教育は小学校で行われ、大連の中国人初等教育は、公学堂にて分離して行われた。^{注38}大連の公学堂では、「公学堂は支那児童のための学校であって、明治38年5月関東州軍政署が市内伏見台に設立したのである。当時支那人の多くは教育の真価を知らず、従って子弟の教育を喜ばない風があった。そこで当局者も徐々に民意の向かう所に従い拡張の方針を探り、教育の本旨も一に児童の身体発育に留意し、徳育を施し、日本語を教えて生活に必須な普通の知識技能の涵養に努めたのであった。」^{注39}

表4. 大連の中国人と日本人の各々の初等教育機関と中等教育機関の設置年と設置場所 (No.) および校名.

大連の中国人教育				大連の日本人教育			
設置年		初等教育	中等教育	設置年		初等教育	中等教育
1905	光緒31	①伏見台公学堂		1905	明治38		
1906	光緒32			1906	明治39	9 伏見台尋常小学校	
1907	光緒33			1907	明治40		
1908	光緒34			1908	明治41		
1909	—			1909	明治42	10日本橋尋常小学校	
1910	—			1910	明治43		(1) 大連商業学校
1911	—			1911	明治44	11常盤尋常小学校、 12沙河子尋常小学校	
1912	民国元			1912	大正元		
1913	民国2			1913	大正2		
1914	民国3			1914	大正3		(2) 大連神明高等女学校
1915	民国4			1915	大正4	13朝日尋常小学校	
1916	民国5			1916	大正5		
1917	民国6			1917	大正6	14大廣場尋常小学校	
1918	民国7			1918	大正7		(3) 大連第一中学校
1919	民国8			1919	大正8		(4) 大連弥生高等女学校
1920	民国9			1920	大正9	15春日尋常小学校	(5) 大連市立実業学校
1921	民国10	②沙河子公学堂 ③大連青年会附属小学校		1921	大正10	16大正尋常小学校	
1922	民国11	④西崗子公学堂		1922	大正11	17松林尋常小学校	
1923	民国12	⑤土佐町公学堂		1923	大正12	18南山麓尋常小学校 19嶺前尋常小学校	(6) 大連女子専修学校
1924	民国13			1924	大正13		(7) 大連第二中学校
1925	民国14			1925	大正14		
1926	民国15	⑥大同女子技芸学校		1926	大正15		
1927	民国16			1927	昭和2	20聖徳尋常高等小学校	(8) 羽衣高等女学校
1928	民国17			1928	昭和3	21早苗高等小学校	
1929	民国18	⑦秋月公学堂		1929	昭和4	22下藤尋常小学校	
1930	民国19			1930	昭和5		(9) 大連女子商業学校
1931	民国20			1931	昭和6		
1932	民国21			1932	昭和7	23霞尋常小学校	
1933	民国22			1933	昭和8	24光明臺尋常小学校	
1934	民国23			1934	昭和9		(10) 大連中学校
1935	民国24	⑧水源公学堂		1935	昭和10	25静浦尋常小学校	(11) 大連市立共和実業学校 (12) 大連工業学校 (13) 大連高等女学校
1936	民国25			1936	昭和11		

各校の設置年における各校名は1936年当時の名称にて記す。

1912 (大正元) 年以降に大連の日本人の子供たちが野球のまねごとをしていても、中国人の初等教育用の公学堂は1920 (大正9) 年まで伏見台公学堂の一つしかないのである。これを観る機会は極限られていたのであろう。

図1^{注40)}に大連の中国人と日本人の各々の初等教育機関と中等教育機関の設置場所を示した。図中に表4の学校名の設置場所 (No.) を示した。1923 (大正12) 年までに大連の日本人の初

等教育をする小学校は7校開講されており、中国人の初等教育用の公学堂は5校開講されており、これらの所在置は図1に示した通りである。距離的に大連の東西4.6km 間と南北2.6km間にあり、日本人小学校と中国人公学堂との最も近い学校間の距離は、138m 以内、学校間の最も遠い距離は655m 以内であり、両学校間の距離は短く、通学時や休日に日本人小学校の野球を観る機会はいくらでもあったと考えられる。



地図データ ©2022 1 km

図1. 大連の中国人と日本人の各々の初等教育機関と中等教育機関の設置場所。注40

このような近接する状況にありながら何故中国人の子供が日本人の子供がやっていた野球を観ずに、また、日本人と中国人の子供が一緒になって野球をして遊ばなかったのかは、甚だ疑問である。

しかし、日本の支配下にある租借地大連における初等科教育はある種の植民地教育であり、それを当時受けた中国人の体験談のインタビュー調査をみることによって、その疑問は鮮明に解明できる。

齊紅深が著し、竹中憲一が翻訳した『満州』オーラルヒストリー^{註41}において、大連の秋月公学堂に1938（昭和13）年に入学した高祥雲氏の証言からは「日本の植民地支配者は中国人を劣等民族と見なし、支那人と呼び、中国人は満9歳になってから公学堂に入学を許可された。……中略……学校では奴隷化教育が行われ、その目的は日本の傀儡政権のための日本語通訳、日本軍や日本の傀儡の憲兵、特務など予備軍の養成であった。……中略……中国人には米を食べることが許されなかった。」^{註42}

1931（昭和6）年に大連の伏見台公学堂に入学した王有生氏の証言からは「日本人に対しては支配者となるべき教育を行い、中国人に対しては奴隷化教育を行った。……中略……日本人居住区と中国人居住区は分けられており、特に旅順口の日本人居住区は新市街と呼ばれ、中国人居住区は旧市街と呼ばれていた。新市街は清潔で閑静な地区でプール、動物園、博物館、図書館などの市の施設があった。旧市街は道が狭く、混雑し、文化施設も少なかった。中国人が頭を押さえられた被支配者の地位にあることは歴然としていた。正規の学校はすべて日本人の経営するものであった。日本人の学校を小学校と呼び、中国人の学校を公学堂と呼んで区別していた。当然日本人学校と中国人学校では学校の規模、校舎、設備、教師、環境などに大きな差別があった。私の勉強していた伏見台公学堂は校舎が古く、運動場も狭く、これといった設備もなかった。……中略……小学校教師の大部分は日本人であり、体操や手工にいたるまで日本人が教えていた。小学校卒業生の日本

語水準は一般に三等通訳程度に達していた。一部の奴隷根性を持った連中は、日本侵略軍の漢奸や軍事通訳、あるいはその手先となっていた。」^{註43}

また、竹中憲一著の『大連 アカシアの学窓 一証言 植民地教育に抗して一』において、1925（大正14）年に大連の西崗子公学堂に入学した楊新元氏の証言では「五、六年の担任はGという教師で、この教師はいつも定規を手にもっていて、わけもなく生徒を叩いた。成績が悪いという理由で叩かれるのはまだ納得できたが、気に入らないことがあると迎いかまわず叩くので、一時間の授業でクラス全員が叩かれることがしばしばあった。ただ怖さが先に立ち、誰も反抗する気持ちになれなかった。……中略……中国本土からの情報が遮断されていたので、組織的な排日運動はなかったが、誰しも中国人としての民族感情をもっており、日本の植民地支配に抵抗する気持ちを持っていた。」^{註44}

1941（昭和16）年に周水子公学堂に入学した張連民氏の証言では、「満州語（中国文）以外はすべて日本人の先生が日本語で授業を行っていた。歴史の授業は紙芝居を使って天の岩戸、元寇、日露戦争などの授業が行われた。……中略……歴史の教師はことあるごとに支那はだめ、支那はだめと口癖のように言っていたという。関東州で生まれ育った者に比べ、山東省から来た者は自分たちが中国人であるという民族意識が強かったので、子供ながらも支那はだめという言葉にいつも不快感を感じていた。」^{註45}

9歳の時に土佐町公学堂に入学した孔弘氏の証言は「ある時、担任の教師が教科書の段落を一通り説明し、教室を見回して「わかったか」と尋ねた。どう答えていいかわからなかったので疑問詞の「か」を取って「わかった」と答えた。教師が顔を真っ赤にして怒りだし、クラス全員の生徒に手を机の上に出させ、真っ赤になるほど定規で叩かれた。」^{註46}

また、孔弘氏は1942（昭和17）年に協和実業学校に入学し、次の証言をした。「多くの教

師は質問に答えられないと「支那人は頭がわるい、バカだ」といって差別したが、…… 中略…… 中等学校の連合運動会があり、日本人学校と中国人学校の対抗試合があった。日本人生徒を打ち負かすことで日頃の民族差別を撥ね返そうと必死にがんばった。相撲、バスケットボール、サッカーは協和実業学校が連続優勝を飾っていた。特に相撲は日本人を尻目に「満州」を代表して友人の王才章君が明治神宮の大会に出場していた。日本の国技相撲で日本人に勝つと、日本国を打ち負かしたような気持ちになった。…… 中略…… 連合運動会の運動場はいつも覆いのある日陰の観客席は日本人に独占され、炎天下の観客席は中国人と決まっていた。運動会後は、お互いに興奮しているのでよく中国人生徒と日本人生徒が集団で喧嘩となることがあった。…… 中略…… 中国人生徒は日本語を習っていても日本人生徒と日本語で話すことはまったくなかった。日本人生徒も中国人生徒に話しかけることはなかった。中国人の子供が日本人街で遊んでいるとドロボウに来たと疑われた時代である。支配と被支配の関係の中で、孔さんの習った日本語は懸け橋とはならなかった。」^{註47}

1932（昭和7）年に西崗子公学堂に入学した周武禄氏の証言は、「大連は日本人居住区と中国人居住区が分かれており、南側に日本人、北側に中国人が住んでいた。周さんたちは南側の日本人居住区にはあまり足を踏み入れることがなかったが、ときどき用事で入ると、日本人の子供から「チャンコロが来た」「ニーヤが来た」と言っではやしたてられることがあった。最初耳にした時は何を言っているのかよくわからなかったが、侮辱語であることがわかり、中国語で怒鳴り返したり、時には追いかけていって喧嘩することもあったという。」^{註48}

以上のような大連の中国人のための初等科教育機関である公学堂での教育は、日本租借地大連で中国人を奴隷化するための日本語学習を中心とした、日本人のための人材を養成する教育であった。そこでの教育は、中国人を劣等民族とみなし、支那人と呼び、侮辱語を浴びせ、教

師による日常的な体罰や暴力が行われるのが当たり前の中国人を奴隷化する教育であった。そこで学んだ中国人の子供たちは、組織的な排日運動をしなかったが、誰しも中国人としての民族感情をもっており、日本の植民地支配に抵抗する強い気持ちをみんなが持っていた。また、大連では日本人街と中国人街は区別され、特別な用事がない限りはそこを歩き来することはなかった。

近くに小学校と公学堂がある場合には、通学途中で中国人生徒は日本人からからかわれ、日本人生徒から侮辱な言葉を浴びせられ、いじめを受けており、このような反日感情が渦巻く中で日本と中国の子供たちが一緒になって遊ぶなんてことは全くなく、日本語で日本人へ話しかけるなんてことはなかった。

さらに、中等学校の連合運動会の日本人学校と中国人学校の対抗試合では、日本人生徒を打ち負かすことで日頃の民族差別を撥ね返そうと必死にがんばり、相撲、バスケットボール、サッカーは協和実業学校が日本人学校に勝ち、日本人に勝つと、日本国を打ち負かしたような気持ちになり、日頃の侮辱や差別に対する鬱憤を晴らしていた。

このような大連の日本人と中国人の生徒の敵対する感情の中では、日本人生徒が野球をやっている小学校と中国人の公学堂がいくら近くにあっても、その日本人が野球をやっている姿を観ようとも、日本人と中国人生徒が一緒に野球を楽しく行う環境にはとても無かったといえる。このような状況の中で大連の公学堂の生徒が日本人の子供たちが行っていた野球を知る機会も体験をする機会もなかったことが明らかとなった。

大連ではないが1930（昭和5）年に旅順公学堂に入学した王克仁氏の証言に僅かな野球経験が語られている。「担任は白石という先生で、白石先生の家にはよく遊びに行った。日本語は一年生から白石先生に習った。…… 中略…… 四年生の頃は、日本人の先生の話す日本語はほとんど聞き取れた。秋の学芸会の時には日本語劇をやったり、学習発表では、日本語

で関東州の地理を説明したりもした。また、当時旅順・大連は野球が全盛で、旅順公学堂にも教職員野球チームがあり、王さんは野球が好きだったので、生徒ではあったが練習に参加させてもらった。…… 中略…… しかし近くに日本人の旅順小学校があり、通学途中、よく日本人生徒からからかわれた。時には帽子を取られたり、「くさい、くさい」と言われ、じろじろ見られたりした。こうした日本人生徒のいじめを受ける中で、自分は彼らと違う中国人なのだという意識を始めた。王さんは、いじめの体験は民族的自覚をうながしたという。…… 中略…… 家は日本人相手の呉服屋をやっていたが、日本人の子供とはほとんど遊ぶことはなかった。」^{注49}

このように日本人と中国人の生徒間同士での野球交流はなく、日本人教職員と中国人生徒との間には一部の限られた人だけの野球交流があったようであるが、これ以外に大連の中国人野球に関して、そのような記録を筆者はみつけることができなかった。

4) 大連の中等教育機関の野球誕生にみられた日中間の違い

表5に大連の中国人野球と日本人野球の概略史を示した。大連の日本人の野球の始まりは、大連に設立された中等教育機関であった。1908(明治41)年に満鉄見習夜学校に野球部「若葉会」の結成、旅順には1909(明治42)年に旅順中学校が設立されて、翌年に旅順工科学堂に野球部「霊陽会」が設立され、各校間で練習試合を始める。1910(明治43)年に大連に大連商業学校と、翌年に南満州工業学校、いずれの中等学校にも野球部が作られて交流対戦が行われた。大連の中等学校野球が形を成してきたのは、1912(大正元)年から始まった南満工業対大連商業の定期野球戦である。翌年の1913(大正2)年から大連では社会人チームも結成されて「実満戦」が始まり、1916(大正5)年には「全関東州野球大会」が開設されて、社会人チームに交じって中等学校野球部も参加したので、中等学校野球部内だけの範囲に留まらず、大いに社会

人に錬磨を受ける良い環境となった。また、特に社会人チームの満俱と実業チームおよび内地から遠征にやってきて、その両チームと戦う野球エリート姿を見る機会は、大連の中等学校野球レベルの向上にも大きな影響を与えた。さらに、中等教育機関の下の初等教育機関の生徒の野球をやりたい意欲を掻き立て、その野球活動実施の動機付けに大きな良い影響を与えたものと考えられた。大連の日本人の小学生たちに野球のまねごと遊びを行う楽しみや将来中等学校や社会人となって野球を行う夢を与えたのであろう。このように大連の日本人野球は、中等学校が始まりであり、ほぼ同時期に開始された社会人野球の始まりの両者が、その後の大連の日本人野球の普及発展を導いていた。

一方、大連の中国人教育の中等教育機関は、中国人を対象としたものは実業学校(大連商業学堂、大連市立協和実業学校、大連大同女子技芸学校)しか設立されず、中国人が中等教育を受けるためには、日支共学となっている日本人のために設置された普通中等学校へ行くしかなかった。実際に日支共学とはいえ、日本人の普通中等学校卒業生を対象とした入学試験や教育課程は中国人の初等教育機関である公学堂を卒業した者にはレベルが極めて高く、越えるには厳しいハードルであり、開講当初から日支共学を取ってきた大連商業学校でも中国人は各学年に1人か2人しか入学できなかった。^{注50}

仮に日支共学の中等学校に多くの中国人が入学できていれば、大連の中国人による中等学校の野球の始まりは変わっていたかも知れない。このように大連の中等教育機関に入る中国人が極めて少なく、公学堂で受けた奴隷化教育による日本人教師への強い嫌悪感もあり、日本人と一緒に野球をやるなんてことは考えられなかったに違いない。このことが大連の中国人野球が普及しなかった大きな原因の一つであると考えられた。

筆者はこれまでに中国の天津市と上海市における野球の始まりについて調査をした。天津市では、アメリカの教会学校の成美学堂を天津に1890(明治23)年に開校し、アメリカの宣教師

表5. 大連の中国人野球と日本人野球の概略小史

西暦	中華民国紀年	大連の中国人野球	西暦	元号	大連の日本人野球
1908			1908	明治41	満鉄見習夜学校に野球部「若葉会」結成。平野正朝をコーチにし、野球大会を開始。
1909			1909	明治42	若葉会对米国東洋艦隊と親善試合をし、3対9で負ける。旅順中学校設立、野球部発足。
1910			1910	明治43	旅順工科学堂が設置され、野球部「靈陽会」が設立。
1911			1911	明治44	南満州工業学校と大連商業学校が設立され、野球部発足。
1912			1912	大正元	南満州工業学校対大連商業学校の定期戦開始。
1913			1913	大正2	大連満州倶楽部対大連実業団の「実満戦」開始。
1914			1914	大正3	
1915			1915	大正4	
1916			1916	大正5	全関東野球大会が開催、中等学校も社会人と一緒に参加。
1917			1917	大正6	南満州工業学校対大連商業学校の定期戦が1919年まで中止。
1918			1918	大正7	内地で軟式少年野球ゴム製ボールが発明。
1919			1919	大正8	大連で各小学校に野球チームが結成され、市主催の少年野球大会が開始。
1920			1920	大正9	南満州工業学校対大連商業学校の定期戦再開。
1921			1921	大正10	第1回全国中等学校野球大会満州予選大会開始。大連商業が優勝し、第7回全国中等学校野球大会へ出場し、ベスト4。「実満戦」の再開。
1922			1922	大正11	
1923			1923	大正12	大連で「少年野球大会」が新聞記事として初めて掲載。
1924			1924	大正13	
1925			1925	大正14	
1926			1926	大正15	第12回全国中等学校野球大会で大連商業が準優勝。
1927			1927	昭和2	「第1回全日本都市対抗野球大会」で関東州代表の満州倶楽部が優勝。
1928			1928	昭和3	「第2回全日本都市対抗野球大会」で大連実業団が優勝。
1929			1929	昭和4	「第3回全日本都市対抗野球大会」で満州倶楽部が優勝し、関東州代表の大連が3連覇。
1930	民国19	1930年代以降にほんの僅かな中国人が野球に参加。	1930	昭和5	第11回全国少年野球大会が早稲田（戸塚）球場で大連の朝日小学校が2回戦まで勝ち上がり、ベスト8となる。
1931			1931	昭和6	
1932			1932	昭和7	「第6回全日本都市対抗野球大会」で満州倶楽部が準優勝。
1933			1933	昭和8	
1934			1934	昭和9	第1回「大連市学童軟式野球大会」が開始。5校8チームが参加し日本橋小学校が優勝。
1935			1935	昭和10	大連商業野球部発部。
1936			1936	昭和11	「第10回全日本都市対抗野球大会」で満州倶楽部が準優勝。
1937			1937	昭和12	
1938			1938	昭和13	
1939			1939	昭和14	
1940			1940	昭和15	大連中央放送局（JQAK）が第7回「大連市学童軟式野球大会」の優勝戦を放送。「第14回全日本都市対抗野球大会」で大連実業団が準優勝。
1941			1941	昭和16	第8回「大連市学童軟式野球大会」中止。「第15回全日本都市対抗野球大会」中止。
1942			1942	昭和17	「第16回全日本都市対抗野球大会」開催し、大連からは大連実業団が出場してベスト4となり、最後の出場となる。
1943			1943	昭和18	
1944			1944	昭和19	
1945	民国34	日本降伏後、野球愛好者の一部が継続して野球活動を展開。	1945	昭和20	
1946			1946	昭和21	大連中等学校野球大会（軟式）を7校でリーグ戦で行う。難民救済基金募集を名目に実満戦を行い、大連中等学校野球大会（硬式）を7校でリーグ戦で行う。引揚げ大連の日本時野球は終焉。
1959		大連野球チームが作られ、遼寧省代表として「第1回全国運動会」の野球競技で8位。遼寧省野球大会で大連が優勝。			
1960		遼寧省野球大会で大連が2年連続優勝。			
1961		自然災害と文化大革命で大連野球は14年間中止。			

西暦	中華民国紀年	大連の中国人野球	西暦	元号	大連の日本人野球
1975		市体育委員会が大連第3中学を重点対象として新たな野球チームを設立。	1975	昭和50	日中貿易が再開し、大連港に入った日本人船員が野球を始める。
1978		大連市野球協会が設立し、大連第3中学が大連チームとなり、全国野球リーグ戦で5位、遼寧省で第1位となる。			
1979		市体育委員会が大連野球・ソフトボール協会を設立。			
1980		市少年チームが大連を訪問した日本少年野球チームと初対戦敗退。 成人野球チームが設立。			
1981		国家体育委員会主催のアメリカ野球専門家による講義に大連から任挙一、李兆熾、陳建新らが参加。 日本石油野球チームが大連で中国野球チームと試合をし、大連野球チームのコーチと選手に参観・学習させる。 中国野球協会が大連で全国野球訓練活動を開催し、任挙一が各姉妹省市の先進経験を学習。 市少年チームは、大連を訪問した日本少年野球チームと2度目の対戦をし、敗退。 市少年チームが全国野球重点チーム調整試合に参加し、アマチュア少年チームが各青年プロチームと対戦し、4位となり、国内野球界の注目を集める。			
1982		市体育委員会は、全市の小学、中学、中専門体育学校の3段階レベルの野球訓練体制を確定。 任挙一がコーチとなり、大連の選手を主軸とする中国の少年野球チームが日本で開催の第1回世界少年野球大会へ参加。 青年チームが全国青年野球大会で優勝。			
1983		大連市体育学校に野球専門クラスが設立。市児童チームが全国児童軟式野球大会に初出場して3位。 青年チームが全国青年野球大会で二連覇。			
1984		市児童チームが全国児童軟式野球大会で優勝。 青年チームが全国青年野球大会で三連覇。 成人野球チームが第1回全国リーグ戦で6位。			
1985		市児童チームが全国児童軟式野球大会で優勝。 青年チームが全国青年野球大会で準優勝。 成人野球チームが第2回全国リーグ戦で5位。 遼寧省体育委員会が大連野球チームを遼寧省の代表チームに確定し、野球チームをプロ転向化。			
1986		市児童チームが全国児童軟式野球大会で準優勝。 大連へ訪問に来た日本国家少年野球チームに勝利。 青年チームが全国青年野球大会で準優勝。 成人野球チームが第3回全国リーグ戦で3位。 成年野球チームが大連でアメリカ籍のアジア人オールスター野球チームと1勝1引き分けの好成績。 国家体育委員会が大連市を全国で野球を積極的展開する10の重点都市の一つに確定。 任挙一が全国野球運動発展の貢献が認められ、中国野球協会の副主席となる。			
1987		市児童チームが全国児童軟式野球大会で準優勝。 大連へ2度目の訪問に来た日本国家少年野球チームに勝利。 青年チームが全国青年野球大会で準優勝。 成人野球チームが第4回全国リーグ戦で4位。 遼寧省がスポーツトレーニング種目構成を調整し、省の野球チームを廃止。 大連市体育委員会は野球チームを存続、選手を調整し、長期的な目標管理。			
1988		大連市の少年野球チームが再度、中国代表として中国、日本、アメリカの3カ国の少年野球対抗戦へ参加し、全勝優勝。 青年チームが全国青年野球大会で準優勝。 成人野球チームが第5回全国リーグ戦で準優勝。			
1989		青年チームが全国青年野球大会で優勝。			
1990		市野球協会は東北財政大学技術開発会社と契約、大連野球チーム連合とし、大連市の野球発展のための経済的支柱となる。			

と教師が、学生に対して積極的に野球を展開し、学生たちは歓迎し、喜んで迎え入れたという。そして武備学堂、電報学堂、北洋大学堂、新学書院、普通中学堂、南開学校などの中等教育以上の学校の中で広く発展した。

1900年代の初めには天津野球倶楽部が華僑によって誕生し、毎週趣味の野球を行い、第15歩兵团野球チーム、日本野球倶楽部、北京海軍陸戦隊野球チーム、北京野球倶楽部との間で試合を楽しんだ。

さらに、1905（明治38）年には南開学校に野球チームが結成され、新学書院、匯文中学校、北洋大学堂のチームと多くの試合をするだけでなく、天津の社会人の華光チームと試合をして好成績を上げるほどに野球競技レベルが向上した。その後、ここの南開学校の卒業生が天津チームの主力メンバーとして中国の全国大会で優秀な成績を獲得した。^{注51}

一方、上海では1895（明治28）年に基督教教会学校の上海セント・ジョーンズ書院にアメリカ帰りの華僑たちが野球活動を教えたのが始まりとされており、この上海セント・ジョーンズ書院が上海の基督教青年会、日本の東亜同文書院、米国の上海ベースボールクラブ、南洋公学と交流対戦した。

その後、1914（大正3）年に華東六大学体育連合会を設立し、上海セント・ジョーンズ大学、南洋、沔江、蘇州の東呉、南京の金陵、杭州の之江などの学校にさらに上海の復旦と南京の東南を加えて八大学体育連合会として、野球活動を行った。1926（大正15）年に上海市野球連合会が設立され、上海の野球選手権大会が開催され、上海チームは全国大会や極東運動会に参加し、輝かしい成績を上げた。^{注52}

このように天津市も上海市も野球の始まりは基督教教会学校であり、その後、中等教育以上の学校にて野球活動が普及発展していき、それらの学校の卒業生によって各市のチームが作られて全国的な大会へ参加し、野球競技レベルの向上によって野球競技の成績を上げていたことがわかる。天津市も上海市も各国の租界地があり、そこにできた野球の倶楽部チームや中等学

校以上の学校と交流対戦を行っており。大連のように中国人のほんの一部の人しか野球をやらなかった状況とは全く異なっていた。

その理由の一つは、1898（明治31）年ロシアが租借地として受け取った大連は、人家少なき寒村の青泥窪であり、その後、商港都市として建設整備されていくが、1905（明治38）年に日本がロシアからその地を受け取った時には、天津市や上海市のように基督教教会学校もなく、当時、この地では野球が全くやられていなかった（1911（明治44）年に基督教青年会館が設立され、そこではインドアベースボールが行われた。^{注53}しかし、このソフトボールの前身であるインドアベースボールが大連で中国人野球へと発展したとの記録はみられない。）ことがあげられる。

また、もう一つの理由としては、租借地大連では中国人のための初等教育にて日本の奴隷化教育が行われ、その後、中等教育は中国人のための普通中等学校の設立の必要性がなく、中国人のための中等学校が設置されなかったために中等学校での野球が中国人にやられなかったことがあげられた。

2. 大連での日本人野球と中国人野球の発展の違い

日本人野球は、満鉄の野球奨励策による満鉄人材育成のために始まり、日本人の子弟の増加により日本人のための中等学校が設立され、その学校には野球部がすぐにつくられ、大連では、南満工業と大連商業学校の試合が定期的に行われる。

その一方では、社会人野球として満鉄の人材確保と内地の野球有名大学から一流選手の発掘とリクルートをしながらかつと実業との対抗戦である「実満戦」を始める。これらの娯楽としての野球が大連における日本人の楽しみとして、行う野球と観る野球の人気の両方を燃え上がらせることとなる。そこには満鉄の人材を大連に定住化させるための策略が背景にはあった。

これらの野球によって、日本人の小学生の少

年たちは野球に夢を抱き、楽しい野球のまねごと遊びを行い、新発明にて開発された軟式野球ボールによって本格的な小学生の野球を行う楽しみを身につけていった。この大連での日本人の野球は勢いよく発展し、小学生は大連全市学童軟式野球大会を行い、決勝戦はラジオ放送がなされる程の盛り上がりを見せた。また、中等学校では、大連商業が全国中等学校満州予選大会で優勝し、内地で開催される全国中等学校優勝野球大会へ参加し、準優勝という快挙を成し遂げた。さらに、社会人では、実満戦での勝者が大連代表として内地で開催される「全日本都市対抗野球大会」へ出場し、第1回大会から3連覇の偉業を成し遂げた。

日本租借地大連での日本人野球は、その当時の日本内地の野球競技レベルの最先端にあり、1908（明治4）年から1942（昭和17）年までの34年間、そのレベルを維持して大発展を遂げた。

これに対して、大連での中国人野球は、日本が大連租借下にて社会人の日本人が社会人の中国人の一部の人に野球を教えて1930（昭和5）年頃に中国人の野球の誕生はみられたものの、戦況が激しくなるにつれて行われなくなり、1945（昭和20）年までの日中戦争が終戦を迎えるまでは、野球活動の記録はほとんどみつけることができず、全く野球の発展はみられなかった。

しかし、1945（昭和20）年以降に日本人が大連を引き揚げた後に、大連の一部の中国人野球経験者は日本人が残した野球道具を使って野球活動を再開していた。日本が降伏して14年後の1959（昭和34）年に大連野球チームがつくられ、遼寧省の代表として第1回全国運動会の野球競技に参加し、第8位となっていた。そのまま大連の野球は発展が続いたのではなく、自然災害と文化大革命によって大連の野球活動は14年間も中止となった。

しかしながら、1975（昭和50）年に大連野球は復活を遂げ、日中貿易が始まり、大連港に入港した日本人船員が港で野球をして、ここでも日本が大連野球の再開に大きな役割を果たした。1979（昭和54）年に大連野球・ソフトボー

ル協会が設立され、1981（昭和56）年には日本から日本石油野球チームが、また、1980（昭和55）年と翌年に日本から少年野球チームを迎えて交流親善試合を行い、中国人の大連野球はレベル向上をする大きなきっかけを得ることができ、大連野球レベルの向上に日本野球が大きな貢献を果たしていた。

この1980（昭和55）年の初めに日本野球チームが大連の中国人野球に与えた成果は、市児童チームは1984（昭和59）年と翌年の全国児童軟式野球大会で2年連続優勝、市少年野球チームは1988（昭和63）年に中国代表として中国、日本、アメリカの3カ国少年野球対抗戦へ参加し、全勝で優勝した。また、市の青年チームは1982（昭和57）年から全国青年野球大会で3年連続優勝し、その後、1989年（平成元）に再度優勝を遂げた。さらに、市成人野球チームは1988（昭和63）年全国リーグ戦で準優勝を果たした。

このように1980年代の初めに日本から来た社会人チームと少年野球チームと交流親善試合をすることによって日本との野球競技レベルの違いを痛感し、その後、大連野球のレベル向上のために練習に力を入れ鋭意努力を行なった結果、どの野球年代においても優秀な成績を収めることができた。

大連で野球をやっていた日本人が1930年代に中国人のほんの一部の社会人へ野球を教え、試合交流をしたことによって、日本降伏後の大連の中国人の社会人野球愛好者によって日本人引き揚げ後に残っていた野球道具を使って野球の再開を中国人の手で行っていた。

その後、自然災害と文化大革命によって14年間野球活動は中断されるが、1975（昭和50）年にその野球活動を復活させる際にも日中貿易再開によって大連へ来た日本人船員が野球を始め大連野球の再開に大きな役割を果たし、そして、1980年代初めの日本野球との親善交流が中国人の大連野球レベルの向上に大きな貢献を果たしたことが明らかとなった。

VI. まとめ

この日本租借地大連での野球は、どの年代

においても超人気スポーツとなり、満俱と実業チームとの対抗戦（実満戦）が毎年行われ、その野球レベルの高さもあり、大連市民を二分して盛り上がり、西公園（のちの中央公園）に作られた野球場は超満員となる大盛況の一大イベントまでになった。

このような大連の日本人野球における普及拡大と発展の要因は、満鉄の野球奨励策による満鉄人材育成のために始まり、日本人の子弟の増加により日本人のための中等学校が設立され、その学校には野球部がすぐにつくられ、中等学校において野球が盛んに行われていった。また、社会人野球として満鉄の人材確保と内地の野球有名大学から一流選手の発掘とリクルートをしながらか「実満戦」を始めたことにより、これらの娯楽としての野球が大連における日本人の楽しみとして、行う野球と観る野球の人気の両方を燃え上がらせることとなった。そこには満鉄の若者の健全育成とその人材を大連に定住化させるための策略が背景にはあった。

これらの野球によって、大連の日本人の小学生の少年たちは野球に夢を抱き、楽しい野球のまねごと遊びを行い、軟式野球ボールによって本格的な小学生の野球を行う楽しみを身につけていった。小学生は大連全市学童軟式野球大会を行い、中等学校では、大連商業が全国中等学校満州予選大会で優勝し、内地で開催される全国中等学校優勝野球大会へ参加し、準優勝という快挙を成し遂げた。

さらに、社会人では、実満戦での勝者が大連代表として内地で開催される「全日本都市対抗野球大会」へ出場し、第1回大会から3連覇の偉業を成し遂げた。日本租借地大連での日本人野球は、その当時の日本内地の野球競技レベルの最先端にあり、1908（明治41）年から1942（昭和17）年までの34年間、そのレベルを維持して大発展を遂げた。

このような日本人の子供から大人まで大連の至る所で普及拡大して行われていた野球に対して、大連の中国人に野球がほとんど受け入れられなかった理由としては、租借地大連では中国人のための初等教育にて日本の奴隷化教育が行

われ、その後の中等教育は中国人のための普通中等学校が設置されず、また、大連の中等教育機関に入れる中国人が極めて少なかったこと。また、公学堂で受けた奴隷化教育による日本人教師への強い嫌悪感のために日本人による中国人への差別や侮辱行為によって日本人と一緒に話たり、遊んだりすることはなく、ましてや野球と一緒に好んで行うことは決してなかったためであった。これらのことが大連の中国人野球が普及しなかった大きな原因であると考えられた。

また、当時の天津や上海では中国人が野球を行い、中国人同士やあるいは日本人やアメリカ人と対戦や大会が行われる程に普及しており、しかし、1898（明治31）年ロシアが租借地として受け取った大連は、人家少なき寒村の青泥窪であり、その後、商港都市として建設整備されていくが、1905（明治38）年に日本がロシアから受け取った時には、天津市や上海市のように基督教教会学校もなく、当時、大連では野球が全くやられていなかったことも天津や上海との大きな違いとして考えられた。

日本人の大連野球は、日本降伏によって終焉を迎えるが、大連で野球をやっていた日本人が1930年代にごく僅かな中国人の社会人へ野球を教え、試合交流をしたことによって、その時の中国人の野球経験愛好者が、1945（昭和20）年の日中戦争の終戦により日本人引き揚げ後に残していった野球道具を使って野球の再開を中国人の手で行っていた。

その後、自然災害と文化大革命によって14年間野球活動は中断されるが、1975（昭和50）年にその野球活動の復活にも日中貿易再開によって大連へ来た日本人船員が、野球を始めて大連の中国人野球の再開に大きな役割を果たしていた。

また、1980年代初めの日本の社会人野球と少年野球との大連での日中親善交流が、大連の中国人野球レベルの向上に大きな貢献を果たしたことが明らかとなり、大連における日本人野球は、大連での中国人野球の誕生とその後の中国人野球の普及拡大と発展に強固な密接な繋がり

をもっており、大連の中国人野球に大変大きな影響を及ぼしていたことが明確となった。

注

- 注1 泰源治、『わが国 球界をリードした大連野球界』(20世紀大連会議, 2009) pp. 1-212.
- 注2 西脇良朋、『満州・関東州・華北中等学校野球史』(西脇良朋, 1999) pp. 1-191.
- 注3 坂本邦雄、『紀元2600年の満州リーグー帝国日本とプロ野球一』(岩波書店, 2020) pp. 118-136.
- 注4 大連市志办公室編、『大連市志、大連体育志』(大連出版社, 2000) pp. 84-86.
- 注5 陈显明, 梁友德, 杜克和, 『中国棒球运动史』(武汉出版社, 1990) pp. 15-17.
- 注6 大連市人民政府, <https://www.dl.gov.cn/>, 2021.
- 注7 西澤泰彦, 『図説大連都市物語』(河出書房新社, 1999) p. 73.
- 注8 西澤泰彦, 『図説大連都市物語』 pp. 40-42.
- 注9 西澤泰彦, 『図説大連都市物語』 pp. 42-59.
- 注10 坂本邦雄, 『紀元2600年の満州リーグー帝国日本とプロ野球一』 pp. 118-119.
- 注11 泰源治, 『わが国 球界をリードした大連野球界』 pp. 9-14.
- 注12 旅順工科学堂(のちの旅順工科大学)は、1910(明治43)年、旅順に設置された。1922(大正11)年に旅順工科大学となった。(泰源治, 劉建輝, 仲万美子, 『大連とところどころ 画像でたどる帝国のフロンティア』 pp. 216-217.)
- 注13 大連商業学校は、1910(明治10)年、社団法人東洋協会設立の商業補修学校が開校、1924(大正13)年、大連商業学校と改称。1928(昭和3)年男子第二科が廃止、1930(昭和5)年、女子部が独立分離し、大連女子商業学校が設立される。(『大連とところどころ 画像でたどる帝国のフロンティア』 pp. 206-207.)
- 注14 南満州工業学校(のちの南満州工業専門学校)は、1911(明治44)年、南満州鉄道株式会社が中等実業学校として南満州工業学校を設立。満鉄は、1922(大正11)年専門学校として南満州工業専門学校として設立。(『大連とところどころ画像でたどる帝国のフロンティア』 pp. 213-214.)
- 注15 旅順中学校は、1909(明治42)年、関東都督府旅順中学校として設立。1924(大正13)年、旅順第一中学校と改称、1933(昭和8)年、旅順中学校と改称された。(『大連とところどころ 画

像でたどる帝国のフロンティア』 pp. 205-206.)

- 注16 大連満俱は、1912(大正元)年に大連の満鉄社員や市中の野球愛好家が大連の敷島町にあった基督教青年会を拠点に作った「青年会野球団」が前身であり、翌年「満州倶楽部」と改名した。大連満俱(満俱)はその通称であり、1916(大正5)年に満鉄社員だけの満鉄を代表とする「大連満鉄野球部」とした。西公園(のち中央公園。現・労働公園)に1914(大正3)年に作られた「西公園グラウンド」(のち満俱球場)が本拠地。(坂本邦雄, 『紀元2600年の満州リーグー帝国日本とプロ野球一』 p. 123.)
- 注17 大連実業は、日本の満州経営にともない進出した満鉄以外の会社や商店などを母体とした。市中の野球愛好家によって1912(大正元)年に前身となるチームができ、1913(大正2)年に「大連実業野球団」が組織された。当初、野球は道楽とみなされて従業員がグラウンド通いをすることを会社の経営者や商店主は好まなかったが、選手の熱心さにほだされたことと従業員の定着などの野球の効果に気づき、やがて支援をするようになった。グラウンドは西公園内に1920(大正9)年に専用の実満球場を建設した。(坂本邦雄, 『紀元2600年の満州リーグー帝国日本とプロ野球一』 p. 123.)
- 注18 満俱球場は、1920(大正9)年に西公園グラウンドを拡充改修し、クラブハウスを設備し、屋根付きスタンドを有し、内外野で2万人を収容できる満俱専用の野球場である。(泰源治, 『わが国 球界をリードした大連野球界』 pp. 44-45., 坂本邦雄, 『紀元2600年の満州リーグー帝国日本とプロ野球一』 p. 134.)
- 注19 実業球場は、1920(大正9)年に満俱球場の西側、公園内を歩いて5分に地面を掘り下げる方式でつくられ、クラブハウスと屋根付きスタンドがあり、内外野の収容定員は17,000人の実業専用球場である。(泰源治, 『わが国 球界をリードした大連野球界』 pp. 44-45., 坂本邦雄, 『紀元2600年の満州リーグー帝国日本とプロ野球一』 p. 134.)
- 注20 全日本都市対抗野球大会は、当時、中学、大学を卒業した名選手たちを中心に全国各地に町のクラブ・チーム、実業団チームなどが盛んに試合をくり返していた。しかし、それぞれの対抗試合だけで、それらのチームを集める総合的な大会がないことに注目して、東京日日新聞の島崎新太郎社会部長が提案し、1927(昭和2)年、東京にて第1回大会を開催し、優勝旗の「黒獅

- 子旗」は大連へ渡った。(池田邦雄編,『激動の昭和スポーツ史⑤「社会人野球」』(ベースボール・マガジン社, 1989) pp. 12-15.)
- 注21 1916(大正5)年に京都少年野球研究会が発足し、少年のための野球ボールの構造を研究し、1918(大正7)年に神戸市の東神ゴム工業株式会社を試作し、1919(大正8)年、最初の大会が京都市第二高等小学校で開催された。その後、大量に生産され、日本全国に拡大普及した。(全日本軟式野球連盟,『軟式野球史』(ベースボール・マガジン社, 1976) pp. 11-17.)
- 注22 1923(大正12)年6月14日付けの大連日日新聞に掲載された少年野球大会の記事であるが、正式名称と何回目の大会かは記載がなく不明である。(泰源治,『わが国球界をリードした大連野球界』p. 83.)
- 注23 1930(昭和5)年8月23日付けの毎日新聞の記事に「第11回全国少年野球大会」でB組(尋常小学校)にて大連朝日小学校が初戦を突破し2回戦へ駒を進めたことが記載されている。(泰源治,『わが国球界をリードした大連野球界』p. 84.)
- 注24 大連市志办公室編,『大連市志、大連体育志』pp. 84-86.
- 注25 西公園(現在、労働公園)は、1904(明治37)年に名付けられ、花園、運動場、遊覧道路等の整備がなされた。その後、野球気運に後押しされて大連実業団と大連満州倶楽部の専用球場が1920(大正9)年、公園内に完成した。1928(昭和3)年頃に市街地が次第に発展するのに伴って中央に位置するようになったので、中央公園と改められた。(泰源治, 劉建輝, 仲万美子,『大連とところどころ 画像でたどる帝国のフロンティア』pp. 49-50.)
- 注26 任举一氏は、2008(平成20)年、当時の大連棒球協会主席であり、元大連体育局副局長・元中国棒球協会副主席である。(澤野雅彦,『姉妹都市と東アジアのスポーツ交流—大連の野球を中心として』中牧弘編, 産業と文化の経営人類学的研究(国立民族学博物館, 2009) pp. 67-85.)
- 注27 馬家新氏は、1959(昭和34)年、当時大連野球チームのエースで第1回全国棒球大会に参加した。金州出身。(澤野雅彦,『日本野球の聖地: 大連と嘉義』北海学園大学経営論集15(1): pp. 1-10, 2017.)
- 注28 澤野雅彦,『日本野球の聖地: 大連と嘉義』北海学園大学経営論集15(1): p. 5, 2017.
- 注29 1960(昭和35)年には自然災害が起こり、国民の生活は困窮した。野球は贅沢と見なされるようになり、そこへ1966(昭和41)年、文化大革命が起こった。野球は敵性スポーツと見なされたのでやる人もいなくなった。(澤野雅彦,『日本野球の聖地: 大連と嘉義』p. 5.)
- 注30 澤野雅彦,『日本野球の聖地: 大連と嘉義』北海学園大学経営論集15(1): p. 5, 2017.
- 注31 坂本邦雄,『紀元2600年の満州リーグ—帝国日本とプロ野球—』p. 120.
- 注32 後藤新平は満鉄初代総裁。1896(明治29)年、台湾総督府衛生顧問。1898(明治31)年からは台湾総督府民政長官を8年務め、台湾の植民地支配を確立させた。これが評価されて満鉄初代総裁に就任した。(西澤泰彦,『図説大連都市物語』p. 43.)
- 注33 坂本邦雄,『紀元2600年の満州リーグ—帝国日本とプロ野球—』p. 121.
- 注34 高島航,『満州における日中スポーツ交流(1906-1932): すれちがう「親善」』京都大学文学部研究紀要57: p. 82, 2018.
- 注35 坂本邦雄,『紀元2600年の満州リーグ—帝国日本とプロ野球—』pp. 121-122.
- 注36 坂本邦雄,『紀元2600年の満州リーグ—帝国日本とプロ野球—』p. 122.
- 注37 全日本軟式野球連盟,『軟式野球史』pp. 11-17.
- 注38 嶋田道彌,『満州教育史』(青史社, 1982) p. 23
- 注39 松重充浩, 木之内誠, 孫安石,『近代中国都市案内集成第33巻 大連 上』(ゆまに書房, 2016) p. 176.
- 注40 グーグルマップ(中国大連市) <https://www.google.co.jp/maps/place/%E4%B8%AD%E8%8F%AF%E4%BA%BA%E6%B0%91%E5%85%B1%E5%92%8C%E5%9B%BD+%E9%81%BC%E5%AF%A7%E7%9C%81+%E5%A4%A7%E9%80%A3%E5%B8%82/@38.917615,121.595133,13z/data=!4m1!1m7!3m6!1s0x35865a143af6583f0x76738aeb6c65c936!2z5Lit6Iv5Lq65rCR5YWx5ZKM5Zu9IOmBvOWvpecgSDlpKfpgKPluIII3b1I8m2!3d38.91398994!4d121.6147!3m4!1s0x35865a143af6583f0x76738aeb6c65c936!8m2!3d38.91398994!4d121.6147?hl=ja>
- 注41 斉紅深, 竹中憲一,『「満州」オーラルヒストリー—〈奴隷化教育に抗して〉』(皓星社, 2004) pp. 1-524.
- 注42 斉紅深, 竹中憲一,『「満州」オーラルヒストリー—〈奴隷化教育に抗して〉』pp. 210-220.
- 注43 斉紅深, 竹中憲一,『「満州」オーラルヒストリー—〈奴隷化教育に抗して〉』pp. 501-513.

- 注44 竹中憲一、『大連 アカシアの学窓 ―証言 植民地教育に抗して―』（明石書店、2003）pp. 74-77.
- 注45 竹中憲一、『大連 アカシアの学窓 ―証言 植民地教育に抗して―』pp. 82-83.
- 注46 竹中憲一、『大連 アカシアの学窓 ―証言 植民地教育に抗して―』pp. 106-107.
- 注47 竹中憲一、『大連 アカシアの学窓 ―証言 植民地教育に抗して―』pp. 108-111.
- 注48 竹中憲一、『大連 アカシアの学窓 ―証言 植民地教育に抗して―』pp. 137-138.
- 注49 竹中憲一、『大連 アカシアの学窓 ―証言 植民地教育に抗して―』pp. 306-309.
- 注50 竹中憲一、『『満州』における教育の基礎的研究 第四巻』（柏書房、2000）p. 360.
- 注51 松岡弘記、樊孟、李俊兰、『中国野球の始まりと日中戦争が戦後の中国天津での野球復活へ及ぼした影響―日中戦争以前の天津の中国人野球と天津日本租界の日本人野球からみて―』愛知大学体育研究室体育学論叢第27号：pp. 57-79, 2020.
- 注52 松岡弘記、樊孟、李俊兰、『中国上海での中国人野球と日本人野球の誕生から発展にみるその違いと日中戦争勃発がその両者の野球へ及ぼした影響』～上海セント・ジョーンズ書院と東亜同文書院の野球部の比較から～』愛知大学体育研究室体育学論叢第28号：pp. 29-51, 2021.
- 注53 高島航、『女子野球の歴史を再考する―極東・YMCA・ジェンダー』京都大学文学部研究紀要 58：p. 177.
- 齊紅深、竹中憲一、『『満州』オーラルヒストリー〈奴隷化教育に抗して〉』（皓星社、2004）pp. 1-524.
- 坂本邦雄、『紀元2600年の満州リーグ―帝国日本とプロ野球―』（岩波書店、2020）pp. 118-136.
- 澤野雅彦、『姉妹都市と東アジアのスポーツ交流―大連の野球を中心として』中牧弘編、産業と文化の経営人類学的研究（国立民族学博物館、2009）pp. 67-85.
- 澤野雅彦、『日本野球の聖地：大連と嘉義』北海学園大学経営論集15（1）：pp. 1-10, 2017.
- 嶋田道彌、『満州教育史』（青史社、1982）p. 23
- 全日本軟式野球連盟、『軟式野球史』（ベースボール・マガジン社、1976）pp. 11-17.）
- 高島航、『満州における日中スポーツ交流（1906-1932）：すれちがう「親善」』京都大学文学部研究紀要 57：63-98, 2018.
- 高島航、『女子野球の歴史を再考する―極東・YMCA・ジェンダー』京都大学文学部研究紀要 58：165-207, 2019.
- 竹中憲一、『『満州』における教育の基礎的研究 第四巻』（柏書房、2000）p. 360.
- 大連市志办公室編、『大連市志、大連体育志』（大連出版社、2000）pp. 84-86.
- 大連市人民政府、<https://www.dl.gov.cn/>, 2021.
- 陈显明、梁友德、杜克和、『中国棒球运动史』（武汉出版社、1990）pp. 15-17.
- 西脇良朋、『満州・関東州・華北中等学校野球史』（西脇良朋、1999）pp. 1-191.
- 西澤泰彦、『図説大連都市物語』（河出書房新社、1999）pp. 14-65.
- 泰源治、『わが国 球界をリードした大連野球界』（20世紀大連会議、2009）pp. 1-212.
- 松岡弘記、樊孟、李俊兰、『中国野球の始まりと日中戦争が戦後の中国天津での野球復活へ及ぼした影響―日中戦争以前の天津の中国人野球と天津日本租界の日本人野球からみて―』愛知大学体育研究室体育学論叢第27号：pp. 57-79, 2020.
- 松岡弘記、樊孟、李俊兰、『中国上海での中国人野球と日本人野球の誕生から発展にみるその違いと日中戦争勃発がその両者の野球へ及ぼした影響』～上海セント・ジョーンズ書院と東亜同文書院の野球部の比較から～』愛知大学体育研究室体育学論叢第28号：pp. 29-51, 2021.
- 松重充浩、木之内誠、孫安石、『近代中国都市案内集成第33巻 大連 上』（ゆまに書房、2016）p. 176.

参考文献

- 池田邦雄編、『激動の昭和スポーツ史⑤「社会人野球」』（ベースボール・マガジン社、1989）pp. 12-15.）
- グーグルマップ（中国大連市）<https://www.google.co.jp/maps/place/%E4%B8%AD%E8%8F%AF%E4%BA%BA%E6%B0%91%E5%85%B1%E5%92%8C%E5%9B%BD+%E9%81%BC%E5%AF%A7%E7%9C%81+%E5%A4%A7%E9%80%A3%E5%B8%82/@38.917615,121.595133,13z/data=!4m1!1m7!3m6!1s0x35865a143af6583f0x76738aeb6c65c936!2z5Lit6Iv5Lq65rCR5YWx5ZKM5Zu9IOmBvOWvpecgSDlpKfpgKPluII3b1!8m2!3d38.9139899!4d121.6147!3m4!1s0x35865a143af6583f0x76738aeb6c65c936!8m2!3d38.9139899!4d121.6147?hl=ja>